

死者の復活

新 茂 之

奨励者紹介[あたりし・しげゆき]

同志社大学グローバル教育センター所長

同志社大学日本語・日本文化教育センター所長

同志社大学文学部教授

[研究テーマ]経験論の哲学

キリストは死者の中から復活した、と宣べ伝えられているのに、あなたがたの中のある者が、死者の復活などない、と言っているのはどういうわけですか。死者の復活がなければ、キリストも復活しなかったはずです。そして、キリストが復活しなかったのなら、わたしたちの宣教は無駄であるし、あなたがたの信仰も無駄です。

(コリントの信徒への手紙一 15章12—14節)

死者の復活にたいする日常的な態度

キリスト教的信仰の要にあるのは、死者の復活であります。死者が復活するのを認めなければ、キリスト教は、その土台を喪失してしまいます。このように言うと、おそらく、ここにいらっしやるひとのほとんどは、死者の復活など、この世界では不可能である、と反論されるのではないのでしょうか。それゆえ、みなさんは、こんなふうを考えられるかもしれません。キリスト教に意味はないのではないかと。わたくしは、キリスト者として、この異議に返答しなければなりません。

とはいえ、わたくしには、これまでの人生のなかで、死者が復活したという事実と直面した経験はないのであります。たとえば、わたくしの家内と知りあって以来、わたくしたちのほんとうの理解者であった家内の母が15年ほどまえに天に召されたとき、わたくしは、その事実を認めたくはありませんでした。とはいうものの、いくら義理の母にもっと生きてほしいと願っていても、いまに至るまで、この世で母の姿を見かけることはまったくありません。わたくしたちの常識では、死者が復活することなど、不可能であるように思えます。

わたくしがこのような場所でこのような形で立てられるのは、ひとえにわたくしの恩師のおかげであります。わたくしは、30年ほどまえに同志社大学の哲学科を卒業し、そのまま同志社の大学院に入り、別の大学に就職するまで、ずっと教育と研究の指導を恩師から受けてきました。わたくしが教員としてほかの大学に行ったときも、わたくしの力ではどうしようもない問題と直面すれば、決まって最初に相談するのは、いつもわたくしの恩師でした。2008年に同志社に戻ってきたときも、わたくしは、恩師の教を請いつづけました。その恩師も2010年に天に召されました。それ以降、この世でわたくしの恩師にお目にかかったことは一度もありません。いまは、恩師のお姿とおことばを思い出すだけであります。死者は、復活しないのかもしれませんが。

わたくしは、哲学科に所属し、科学哲学という授業を担当しています。この講義では、科学者がどのような探究を実際に行なっているのか、科学がどのような種類の真理を明らかにしているのか、科学のなかで理論がどのような役割を担っているのか、科学を巡る、こうした問題を、哲学的な観点から考察しています。科学のなかでいちばん重要であるのは、わたくしたちが考えたことから、実験とか観察とかに基づいて、確認したり反駁したりしていく、という実際的な営みであります。わたくしは、授業のなかで、それに力点を置いています。それと同時に、授業を離れても、わたくしは、普段いろいろなことを思うときも、実際的な結果の吟味を重視しています。すなわち、どのような考えであっても、それに基づいて実際的に行為したときに獲得できる効果を見さだめなければ、その意味は分からない、と。しかし、どうでしょうか。わたくしの限定的な体験のなかであっても、実際的な経験に力点を置けば置くほど、わたくしは、つぎのように言わなければなりません。死者の復活をはっきりと言いきれるだけの証拠は、これまでのところ、少なくとも、わたくしの手もとにはない、と。

このように、わたくしの周りには、死者の復活を裏がきするような事実は、一つもありません。それどころか、それを否定しているのではないかと思えるほどの経験が多く存在しています。そうであるのに、なぜ、聖書は、死者の復活を強調するのでしょうか。このような疑問を投げかけているわたくしに、きっと、みなさんは、こう言いたいはずです。どうして、おまえは、死者が復活するという、不条理な言明を掲げているキリスト教に帰依しているのか、と。この鋭い問いかけにたいして、わたくしは、どのように答えればよいのでしょうか。なぜ、わたくしは、キリスト者として、ここに立ち、死者の復活という、日常生活ではほとんど遭遇することのない事態に言及しているのでしょうか。

日本語には、百聞は一見に如かず、ということわざがあります。いろいろと話をいくら聞いてみたところで、それだけでは、わたくしたちは、それが真実であることを容易には信じません。とはいえ、それをみずからの目で実際に確かめられたら、すぐにそれが真実であると確信します。いまのわたくしの態度は、これとは正反対であります。わたくしは、はっきりとは検証できない、死者の復活を、聖書の話に耳を傾けるだけで、それを実際に見ようとしなくて、信じようとしています。大量の情報が瞬時に飛びかう現代の社会にあって、このような態度を取ってしまうえば、どのような事態が生じるでしょうか。悪意のある人間は、わたくしを騙して、わたくしから金銭を掠めとるかもしれません。わたくしの生命が危険に曝されるような事態も起こりかねません。確かな証拠がないまま、あることを信じてしまうように傾いていけば、わたくしは、いずれは、ひどいめに遭うはずであります。それゆえ、とくにいまの世のなかでは、そのような姿勢を推奨すべきではありません。そうであるのに、なぜ、わたくしは、それに近いことをしようとしているのでしょうか。

信仰の実感

現在、わたくしは、自宅に近いところにある教会に通っています。学会とか会議とか、あるいは、大学のしごととかがなく、体の健康を保っているかぎり、毎日曜日には、教会に行き、聖書を読み、讃美歌を歌い、牧師の説教を聞いております。現在、わたくしは、教会の役員として、けっして十分とは言えませんけれども、教会に奉仕しております。ときには、礼拝の司会をしたり、ときには、受付をしたり、ときには、教会学校のキャンプを企画したりして、体の許すかぎり、わたくしは、教会の活動と運営に携わっております。とはいえ、慌ただしく過ごしているのに、わたくしを教会に向ける原動力は、いったい、どこにあるのでしょうか。休

みを返上してまで教会に行く理由がわたくしにはあるのでしょうか。死者の復活を柱に据えているキリスト教は、ほんとうに、わたくしを欺いていないのでしょうか。

これまで繰り返して述べてきましたように、わたくしは、やはり、死者の復活にたいする確かな実感がないのを告白しなければなりません。しかしながら、それと同時に、聖書のさまざまなことばは、わたくしの毎日の生活をしっかりと支えてくれています。それは、紛れもない一つの事実であります。たとえば、「マタイによる福音書」には、つぎのような文言があります。「すべて重荷を負うて苦勞している者は、わたしのもとにきなさい」（11章28節）。そのうえで、聖書は、「あなたがたを休ませてあげよう」（11章28節）と述べます。教会に通いはじめてまもないころ、哲学を勉強していたこともあって、わたくしは、聖書のいろいろなところに引っかかりを感じて、聖書の記載する内容にいちいち突っかかっていました。わたくしは、指導教授の勧めで、先生が通われていた教会に行っておりました。とはいえ、礼拝に出席するたびに、聖書にたいして攻撃的になっていくわたくしがそこにはありました。なぜ、当時のわたくしは、聖書を非難の対象にしていたのでしょうか。

わたくしたちにはほかのひとを責めるような側面があります。確かに、相手が危害を加えてくるようであれば、わたくしたちは、みずからの身を守らなければなりません。そのような危険がないのに、わたくしたちは、ほかのひとの悪口を言ってしまいます。面白半分の軽い気持ちでわたくしたちは相手を貶めているのかもしれない。しかしながら、他者のあらを探しそれをきつく糾弾しようとしているときのわたくしたちの心は、たいへんに尖っています。そのような状態にある心には平安はなく、ただただ荒々しい風が吹きまわっています。それが続けば、心はどんどん荒んでいくのではないのでしょうか。なるほど相手に非があるのでしょう。とはいっても、そこだけに目を向け、それだけをあげつらっているかぎり、わたくしたちの気持ちはいつまでもたっても落ちつかず、結局のところ、身も心も疲れはてていきます。

わたくしが教会に導かれたのは、大学院生のときでした。哲学の勉強に専念しておりましたが、その道はけっして平坦ではなく、みずからの実力との闘いでした。みずからの力のなさを痛感する日が間断なく襲ってきました。ほんとうに修士論文を完成させられるのであろうか。わたくしは、焦っていました。修士論文をようやく書きあげたあとも、研究はいっこうに進みません。わたくしは、いらいらしていました。みずからの非力を認めず、それに面と向かうことすら避けていました。みずからの弱さを覆いかくすために、わたくしは、聖書を否定しようとしていたのかもしれない。とはいえ、そのような振るまいは、結局のところ、わたくしの身も心も疲弊させていきました。

一方で、当時の教会には、進んで奉仕をされるひとびとがいらっやいました。いつもわたくしに声をかけてくださる方。わたくしの拙い研究の話を聞いてくださる方。あるいは、讚美歌が礼拝堂を満たしていました。真摯な祈りがありました。わたくしに語りかけてくる説教のことばがありました。このように、わたくしは、聖書の記述を疑問視しながらも、他方では礼拝堂の誠実な雰囲気驚きを覚えていました。そのときにわたくしが出会ったみことばがさきほど紹介した聖句でした。聖書がわたくしになにか危害を加えていたのでしょうか。聖書は、わたくしの欠点を並べたてて、わたくしを責めたてていたのでしょうか。そんなことはけっしてありません。そうであるのに、わたくしは、聖書をまえにして勝手に頑な態度を取っていました。なぜ、そんなに気おう必要があるのでしょうか。そんなに肩肘を張らず、もっともっと肩の力を抜いて、わたくしは、聖書を手にしてもよいのではないのでしょうか。というのも、「マタイによる福音書」は、わたくしにこう

語りかけているからです。「休ませてあげよう」（11章28節）、と。みずからの弱さを見せないために周りにたいして強硬になって、かえって疲れはてていたわたくしにとって、肩の荷が降りたように思いました。それは、一つの実感でありました。

導き手としての聖書のことば

聖書は、つぎのように続きます。「わたしは柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい」（11章29節）。それまでわたくしの心は荒廃し、その疲労も蔓延し、わたくしの頑強なありかたは、その状態をますます進行させていきました。みずからのうちに引きこもってただただ尖った人間になっていたわたくしにたいして、聖書は、キリスト・イエスのくびきを担え、と説いていました。くびきは、たとえば、二頭の牛を一つに繋ぐための大きな横木であります。すなわち、この聖句は、キリスト・イエスの重荷をキリスト・イエスといっしょに背おうように命じています。そのようにすれば、わたくしの心は、それまでの重しから解きはなたれます。というも、聖書は、こう語るからであります。「そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう」（11章29節）。このことばをまえにしたとき、わたくしの心から出ていたとげは、落ちていきました。聖書のことばは、わたくしにはつぎのように聞こえてきました。なぜ、おまえは、聖書をそれほど攻撃するのか、と。もっともっと素直に聖書を読めばよいのではないかと。

そのように心の持ちかたを変えると、お腹の痛みがずっと消えるように、わたくしの心はずいぶんと楽になりました。それは、ほかのひとがどのように言おうと、一つの実感でありました。みなさんには、だれかほかのひとを好きになった経験があるでしょう。わたくしのような年齢になってしまえば、恋愛にはかなり鈍感になってしまいます。それでも、年が取ってから授かったこどものことを思うとき、いまでもほんとうに心が温かくなります。わたくしのこどもはいまではいっしょに遊んでくれませんが、小さかったこどもを胸に抱いていろいろなところに連れだって行った記憶は、いまでもわたくしにほほえみをもたらしてくれます。飾りたてのまったくないこどもは、いつも、よいかおりをわたくしの腕のなかで漂わせていました。こどもは、よくわたくしに語りかけてくれました。わがままな要求もありましたけれども、わたくしにとっては、それも喜びでありました。わたくしは、それを肌で感じておりました。それと同時に、その記憶は、いまでも、わたくしにあっては、あいかわらず一つの実感のままであります。

みなさんにも、好きなひとのことを思うとき、そのひとがそこにいなくても、写真とか動画とかを見て、心がせつなく動く経験を持ったことがあるのではないのでしょうか。それは、心理学的な検査の数値に俟つまでもなく、一つの実感ではないのでしょうか。そこに実験的な数値に基づく証拠が必要でしょうか。淡いけれども、心が温もる感じは、だれがどのように言うとも、一つの実感であるはずで、わたくしたちは、それを知っています。

それと同じ実感が聖書をとおしてわたくしに現実にあります。それは、「休ませてあげよう」と聖書がわたくしを抱きよせてくれたときに感じた、硬い心がほぐれたときの、あの実感でありました。それだけではありません。「ローマ人への手紙」には、こんなことばがあります。「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである」（5章3、4節）、と。たいへん苦しい状況にあるときに、それはわたくしたちに辛抱の必要を教えてください。耐えしのぶことをとおして、わたくしたちは、鍛えられて困難な状況に向きあうようになれる。そのようにして、わたくしたちは、まえに進んでい

ける、という希望に身を委ねられます。最近、これを実感できるできごとがわたくしにありました。

いろいろなしごとをしていると、わたくしの力量の不足が原因で困難に突きあたる場面も出てきます。容易には解決できず、場合に依っては、わたくしは、その責任を取らなければなりません。職務を投げだして逃げだしたい気持ちがわたくしを支配します。このときに、聖書は、それに耐えてみずからを鍛えよ、とわたくしに語りかけています。なぜなら、そのさきには希望があるからであります。わたくしは、みずからの任務を放りださず、課題を直視し、誠実に対応しようとしています。なるほど、孤独を感じる時もあります。それでも、そこをぐっと堪えていると、周りの助けがわたくしを救ってくれるようになります。解決に向けた方向が少しずつ見えてくるようになります。とはいうものの、残念ながら、問題が完全に解消するというようなことは、決してありません。それでも、つぎの一步をとにかくも踏みだせるようになります。このようにして、諦めないで真摯な姿勢で難局に向かう態度は、ほんとうに希望を生み出すのです。わたくしは、これをことばのうえだけで理解しているだけではありません。わたくしは、みずからのしごとを実際に遂行していくなかで、わずかではありますけれども、確かにこれを実感しています。キリスト者として歩みだしているわたくしにとって、聖書は、わたくしの生きかたの導き手として実際的に働いているのです。

信じようとする意志

パウロは、「コリント人への第一の手紙」のなかで、「もし死人の復活がないならば、キリストもよみがえらなかつたであろう」と断言します(15章13節)。聖書の記述に基づけば、キリスト・イエスは、十字架のうえで処刑され、死者のなかからよみがえられました。「マルコによる福音書」の記者は、「イエスは声高く叫んで、ついに息をひきとられた」と書いております(15章37節)。キリスト・イエスは、死者の世界に下られました。しかし、その後、キリスト・イエスは、蘇られます。「マルコによる福音書」は、そのときの様子をつぎのように伝えています。「あなたがたは十字架につけられたナザレ人イエスを捜しているのであろうが、イエスはよみがえって、ここにはおられない」(16章6節)。この福音書によると、マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ、サロメの三人は、キリスト・イエスの亡骸に香料を塗ろうとして墓に行きました(16章1、2節)。墓の入口を塞いでいた大きな石が脇に転がっていて、そのまま、かれらは墓のなかに入っていました(16章4、5節)。すると、そこには天使がすでに座っていて、その天使は、うえに引いたように、かれらに語りかけました(16章6節)。キリスト・イエスは、復活されたのです。

キリスト・イエスの復活は、死者の復活を意味しています。だから、パウロの言うように、死者の復活がなければ、キリスト・イエスの復活もありません。この点を押さえたうえで、パウロは、「コリント人への第一の手紙」のなかで、こう力説します。「もしキリストがよみがえらなかつたとしたら、わたしたちの宣教はむなしく、あなたがたの信仰もまたむなしい」(15章14節)、と。それにもかかわらず、わたくしたちは、死者の復活を見たという経験がないという理由で、それを認めようとはしません。すでに指摘したように、現代の社会的情勢に鑑みれば、そのような態度は、合理的でありはします。しかし、キリスト者にあつては、死者の復活を受容しなければ、それは、キリスト・イエスの救いの否定を意味します。そうなれば、パウロがその生涯を捧げたキリスト教の伝道の業にも意義はなく、そのようにして、結局は、わたくしの信仰は虚無に等しくなります。

これまで述べてきたように、聖書の教えがわたくしの生活を支えているというのは、わたくしにとって紛れ

もない事実であります。パウロは、みずからの信仰に依拠して、その事実を死者の復活に結びつけています。すなわち、死者の復活がなければ、キリスト・イエスの蘇りもなく、わたくしが実感している聖書のことばは、それぞれ、内容のない虚言でしかなくなります。すると、これまでわたくしを導き支えてきた聖書のことばは、わたくしを欺いていることとなります。それでは、翻って、キリスト者として歩みだしたわたくしの人生は、幻想であったのでしょうか。幼い子どもを教会に連れて行って、「早よ帰ろ」とわたくしを困らせていた、あのこどもの様子は、まやかしてあったのでしょうか。

わたくしは、そうではないと言わなければなりません。いま、わたくしは、現にここにキリスト者として立っています。わたくしにとっては、この事実は、現実であり真実であります。しかしながら、やはり、わたくしがキリスト者であるかぎり死者の復活を認めなければ、いまここにある様子は、その実在性を失います。それゆえ、これまでの信仰の生活を否認したくないのであれば、わたくしは、キリスト者として、死者の復活を信じようとしなければなりません。すなわち、死者の復活は、それを目の当たりにしたことの無いキリスト者にとって、それを信じようとするキリスト者みずからの意志の問題であるのです。パウロは、キリスト者として生きていきたいと思っているわたくしに、死者の復活を信じるのか、それとも、死者の復活を信じないのか、それを問いただしています。パウロは、わたくしの信仰を問うています。わたくしは、パウロに、こう応えたいのであります。神の招きがあって洗礼を受けたわたくしは、同じように聖書の導きを通じて死者の復活を信じようとしている、と。

このように言ってみたとところで、死者の復活に納得できないひが多いのではないのでしょうか。すなわち、死者の復活が、信じようとする意志に係わることからであるとしても、おまえは死者の復活を実際に示しているわけではなく、やはりおまえは幻のなかにいる、と。もはやこの反論に応答することはわたくしにはできません。わたくしが信じているのは、幻影であるのかもしれませんが。とはいえ、わたくしは、そのような幻想とともに生きぬいた人物を知っています。それは、同志社の校祖である新島襄であります。わたくしたちのいるクラーク記念館が実在するのを否定するひはいないでしょう。しかしながら、キリスト者である新島の、同志社にたいする深いキリスト教的な愛がなければ、いまの同志社は、ひょっとして、なかったかもしれません。その意味で、わたくしのまえには新島の確かな足跡があります。新島のように、同志社に捧げられるものは、わたくしにはなにもありませんけれども、安心して新島のあとを辿り、キリスト者として、勇気をもって、少しでも同志社に貢献したいと思っております。

ひとこと、お祈り申し上げます。ご在天の父でいらっしゃる神さま、このようにあなたのみことばを分かちあえましたこと、ほんとうにありがたく、あなたのお導きに感謝いたします。このような機会を与えてくださったキリスト教文化センターのかたがたにも深甚の感謝を申しのべたいと存じます。神さま、わたくしたちには、トマスのように、見ないかぎり信じないと言って憚らない頑な心があります。それを告白いたします。けれども、神さま、どうか、あなたのみちからによって、それを打ちくだき、こどものように素直にあなたを賛美できる心にわたくしたちを近づけさせてください。あなたを救い主であると宣言した校祖新島襄の遺志を継げますように、同志社に集うわたくしたちひとりひとりを強めてください。すべてに感謝して、この祈りを主の御名によって捧げます。アーメン。

※本文中の聖書箇所は、口語訳聖書を用いています。

2017年10月4日 今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録